



更



氏

小鏡月録

上下

桐壺 二

篇本

并空蝉

夕顔

三 芳窓并末摘花

四

おんあふあ

五 花宴 六 菱

七

柳

八 花散里 九

六

白石

十一 花盡并蓬生

関屋

十二 花雲

松山

十四 玉葛并初音

十六

しん

十七 湖路

湖路

雲



常夏 篝火 野分 西寺 菖蒲
 五木柱 十八 橋之松 十九 藤裏蒸
 廿 為菜工下 廿一 柏木
 廿二 横笛并鈴虫 廿三 夕旁
 廿四 巾着 廿五 幻
 廿六 雪隠
 廿七 白兵衛の并取柄 竹河 蕙中
 字溜十帖 一橋水 二椎之下 三縮扇
 四 子宿木 六 吾妻屋 七 浮船
 八 蜻蛉丸 手習 十 夢浮橋 法師云

一 桐壺と云巻乃事内裏の内よある内殿の
 名也志けい志やと云まりつ初の事也
 けきりつがよ光海氏乃市母ささりそを
 形ふりてささり壺のかういとける
 此かうい志一の人名と乃むすめふ志よ
 てハカ一父ハ天狗言よてうせし一人乃
 子也形らみささりハあわてみやつみ
 小内へ集積ふより一西門事ハ外
 吹き免うをたさみ一ハハりた人乃女

清文衣^{ヤウ}え^ニやす可^カま^マう^ウひ^ヒ之^ノ新^ニめ^メさ^サる^ルを^ヲ
に^ニ美^ミま^マ一^ニ出^デけ^ケう^ウい^イ乃^ノ山^ノら^ラう^ウ小^コ出^デま^マさ^サ
せ^セ子^シ山^ノみ^ミや^ヤ三^ニう^ウ子^シあり^リ子^シ夏^ノ乃^ノ比^ヒ山^ノ
母^ノう^ウい^イあ^アや^ヤ三^ニ子^シ病^ノ階^ノわ^ワあ^アま^マい^イ内^ノ裏^ノ
乃^ノ因^ノま^マえ^エ人^ノの^ノり^リと^ト札^ノめ^メと^トする^ル事^ノな^ナま^マ
ま^マの^ノ山^ノ崎^ノト^ト一^ニ里^ノへ^ヘつ^ツて^テ子^シふ^フま^マめて^テの^ノ
心^ノ所^ノ一^ニせ^セら^ラな^ナま^マい^イの^ノ車^ノ持^チま^マく^クと^ト子^シ氏^ノて^テ
出^デ結^ケふ^フ車^ノい^イん^ン一^ニま^マく^ク日^ノま^マよ^ヨく^ク乃^ノ事^ノ
な^ナま^マい^イの^ノわ^ワら^ラる^ルげ^ゲれ^レ人^ノを^ヲ送^セる^ルさ^サま^マい^イり^リ

な^ナあ^アま^マわ^ワあ^アの^ノあ^アり^リま^マわ^ワの^ノこ^コま^マあ^ア
あ^アの^ノ一^ニく^クい^イま^マも^モ絶^ツけ^ケい^イ不^フま^マの^ノこ^コ
わ^ワう^ウり^リま^マわ^ワれ^レけ^ケり^リひ^ヒま^マを^ヲ因^ノ裏^ノを^ヲ出^デけ^ケら^ラ
一^ニ折^ツ四^ノつ^ツあ^アり^リを^ヲ一^ニま^マを^ヲ送^セり^リて^テさ^サ
海^ノく^クれ^レ事^ノ我^ノの^ノお^オく^クせ^セ息^ノも^モあ^アへ^ヘく^ク
ま^マの^ノ物^ノも^モ一^ニ送^セる^ル乃^ノ送^セる^ル事^ノ
限^ノわ^ワか^カず^ズ利^ノき^キ道^ノ乃^ノま^マり^リま^マい^イり^リ
い^イの^ノ海^ノり^リ一^ニま^マは^ハ命^ノを^ヲわ^ワら^ラる^ル
一^ニ折^ツれ^レか^カら^ラい^イか^カき^キら^ラれ^レ身^ノを^ヲ一^ニ山^ノ心^ノに^ニ

まゝなるゝハ右の位キナキもまふさ梅クニが
びり〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
こも又世のそ〜とびり〜り〜り〜り〜り
さうの西ハち〜り〜り〜り〜り〜り
三位乃位を送〜せり〜り〜り〜り〜り
是也の〜り〜り〜り〜り〜り
文衣の母と同く〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

なふ又書よ〜り〜り〜り〜り〜り
の命婦ミナトメと云ニヒツ西原ニヒツを川カハはらひハはらりハをカりハ
な記人のヤト宿ヤトあハとハりハるハ黒カねハとハもハはハりハ
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
まハけハまハ 雲クモのハ上ハ人ハ小コ萩ハギあハらハあハのハ屋ハ
とハ流ハをハまハりハあるハ聖ハおハハハ硬ハ女メのハ黒カまハてハのハ
夏ナツあハれハハハなハまハ人ハハハ宿ヤトねハとハあハらハハハ付ツきハせ
おハらハ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
もハとハへハあハ宮ミヤ乃ハ傳ハ事ハをハ讀ハみハ〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

文成の〜露わきむらゝゆ乃音り

こゝまきつりまもと茂智ひよるやま

まよみむりーならきけつていづいゆわ
まゝまゝのいゝ文衣^{カクマ}御ー木造りさうさう
とくくあをさけりあーてはらつき雅し
なわぶらわ物こつふ事れあうはまう雅
れ人あとい付へしし文衣人小福さそ
まのまきまてうせま^ま人かま^まさきさうろ^ろ結^結
もあまー〜くは^は氏七の年又〜

りあ^あの^のま^まの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
も^もあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
な^なの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
ま^まの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
清^清形^形光^光つ^つや^やま^まう^うつ^つ〜[〜]く^くお^おり^りき^き
ふ^ふめ^め〜[〜]光^光君^君と^とほ^ほき^きあ^あ〜[〜]ふ^ふり^り光^光海^海氏^氏と
云^云也^也そ^そあ^あの^のこ^こま^まん^んき^きう^うつ^つ〜[〜]ま^まと^と〜[〜]か^かの^の
ま^まの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
ふ^ふの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
ふ^ふの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ

云事 ころもとゆい 小むらさき
りけきれけぬてあけぬさ里 さのす原
らぬりて 源氏の君十二もてしゆ
いそ日源氏を殺りて只人子成孫ふいそ
ゆり光源氏を殺りてゆいのほひさきい
き乃大臣乃むとあよ山門乃源氏をくひ小
てあを奪て居るそりお天臣れもそり
にり—まひそよあゆひのうんころふと
ゆ初もとゆいの小葉ころり事—に宮

なまのものとゆい だむわ小じら所きの糸
あつとてととゆいととる事あわうとてよ
らせうる事—なり又あゆひのうんの父
大臣引のまこ小まのりあよ武家よあや
親ふころりゆりそれあつ流もやと
むら—むわあ—け—あわもとゆい—なま
り—ま—ゆけ—又け巻よ—やと日
の宮—人—を—名—乃事あり源氏の
ま—母—なり—お—お—御母—交り—りて

お乃内門むりや〜あけりせたまひて
以何^何愈^愈と年月少しにもわすれ〜
むりや〜あけりせたまひて
くむりや〜あけりせたまひて
乃つか孫もはま〜あけて西と乃舟
もあ〜雪の上も泪^涙あけてせ孫も
むりや〜内門乃あ〜あけりせたまひて
お〜まひ先代乃四^四宮〜あけりせたまひて
あ〜あけりせたまひて

あ〜あけりせたまひて
乃交^交小なる〜あけりせたまひて
と〜あけりせたまひて
ま〜あけりせたまひて
つ〜あけりせたまひて
よ〜あけりせたまひて
あ〜あけりせたまひて
あ〜あけりせたまひて
あ〜あけりせたまひて

山峯よりわらへしなきふ^ま上よてま^まま^ま
いきりつがれ海門と^しや^也遊^遊ののみり
吃^吃らしたわ

○二

えくきつ 山卷^{ちやの}の面^{ちやの}東^{ちやの}お物^{ちやの}海^{ちやの}に云
由^か裏^り事^りの源^り氏^り乃^り君^り川^り才^り多^りか^りん^りの^り因^り襲^り乃^り海^り殿^り
井^り不^り一^りた^りり^りま^りひ^り海^りは^りま^りく^りわ^りさ^り
めん^りと^りや^りお^り能^り取^り中^りお^りと^りあ^り一^りの^り事^りん^り
し^り乃^り海^り子^り志^りう^りと^りあ^りつ^りひ^りの^り上^りの^り海^りあ^りの^り
な^りわ^り彼^り君^りと^り海^りの^りお^りま^りう^り或^り都^りと^りひ^り
^か

一 人^り系^りて^りく^り海^りお^りま^りす^りま^りお^りり^りあ^りま^りの^り物^り
か^りつ^りり^りの^りけ^りら^りし^り一^り人^りお^りま^りな^り茂^りわ^りら^り
せん^り何^りく^りの^り事^りを^りあ^りし^りら^りま^りこ^りれ^りよ^り面^り東^りお^り
志^りお^りま^りう^りめ^りと^りう^りま^りう^り乃^りむ^りり^りの^り言^り葉^り
二^りの^りま^りり^り ち^りこ^り ち^りう^りせ^りお^りむ^りあ^り 日^りる^り
ま^りす^りま^りで^り む^りひ^りこ^り 菊^り 花^り 手^りみ^り折^り
て^り 是^りお^りハ^り物^りう^りり^りと^りか^りぬ^りへ^り一^り山^り卷^りよ^り
こ^りう^りが^り中^り將^りの^り物^り海^りふ^り玉^りつ^りの^り内^り向^り乃^り
こ^りの^り事^りを^りふ^りひ^りと^り海^りあ^り一^りた^りわ^り母^りと^り

夕のかり上りし物徳ふふしここと云
事あり玉のけしこあつたへる
さてこのりよくへハ四月也せち分
なぐ徳あふくふぎぬりとおのりハ
くはむしの上程うい四まよ亦遠く
事ありし也さで強おいこあり
のまへ出さしやおはしきさんとけるよ
あつらふかよてわるし徳家人の伊よの
命とつひしものもくおりて亦遠あわ徳

亦ありししよりみおるは亦遠に付
しき際なと付へし伊よのりけり
厨の屋りあきんあなも面白かり
あつたへおりして亦遠ありまさうてある
この伊よのすけい志のけりまはくし
亦よのぬしはなは源氏志のひて女
乃福するおへおりして亦亦志おへハ
福するおへおりしとて我強上たう

つらなるまらつまるわしよ志乃ひ入てと
わくの孫よ。女思ひけす思て

其原やあせや。わあるわれうきふ

あつもあつすきゆりさくまこ

とよろ一故はうらみ海まきえくまこ

とハソひけま山人。我、志おもあつて

思ありわらう人よ。侍られすけあつり

高とあるまき人よ。あつてはな人よ。あつ

海心孫とひくうでうん。也きえとあつ

ソひてあつるよあつ孫まうまき志ろく

まよわ孫ひり。成行あつ。又もあついあつ

まうすいよくうん。ハハハつと

一思ひ孫ひん家や。す家の世まきと

忘孫を侍よもの。け死て海あまよ成て

わらり。をむうん。なて二家院の年のだ

いふすまをらまき侍られあつ家ハ中

川わらり也。今の系こく川。也あ遠に

中川一付。この地。わらりよ。かてし

こゝ玉つつとりくわおす事一野中
大物作充^サのりミリ物作小いありや
女のもとへ我ともうら乃振あゆ人、よ
ひげのともちうす大畑うわかふるり
以上人車にありえりひと云と云く
うと思ふ一我のハ事あす神いあさ
ましくおのよあゆわと云をあきて
うくあひりせり回らむこ人と引け
おまきくありおあなともあわらわ

琴の音もまこもえあぬ有^サ

ついでなき人^ニあきまやとく^ニあき人

とよみくわう物うわこの女お中へり
とまき神ハ女ハ心とせぬくとけ思ふら
Pそりーや^サおののかてしこよハ是も
あひくくうひ路ひていおきうらさ
こーおあふま人さへあきまてこの世
ひらうとも思ハありやうるまきあは
およまきうらまきこを云とまきてり

すりあふ家よかきして看たわを町とら
乃君おりーう海よさきりーと眼ミをわ
射くもせす海とて眼まこの事と
山くつ乃つまかうわともおわくハ
あられ然りけふかてー乃花
電よともわそのら程あし行りく建ぬわ
ーこころわおーてもなまこくくー
この人うー夕り初の美さくんーと
かひあまーの院ま死すなてー

こいむつつなわ十七の美さくんも
かよーの院まいむーさうの天皇
四乃五子と成るの文院すこまあふ也
こへみち乃くハあかりまなうつさ終
をかとりやあしよハぬ美さ乃院と
也六束河原に院とも中もあふー寺
とも鞍馬の事也又電う武部、物清ハ
ろをれむとめ終まへりよひー
あふともあがりぬこハ地うー見家

あせすふとてへらうく孫侍あうやく
 とくくくくくくくくくくくくくくくく
 かくの六目のくくくくくくくくくく
 あきまきくくくくくくくくくくくく
 うらやきあひてくわきよけ女のあま
 わ事平おあふくくくくくくくくくく
 のる海も何りきくくくくくくくく
 きくくり 及武部
 きくくくくくくくくくくくくくくく
 きくくくくくくくくくくくくくくく

〇うらやま 山 卷うらやま と云事
 本く乃巻の百遠所と兼侍ふ介り書ふ
 也色いしくいさく本く乃海身にあわ
 さきあふくくくくくくくくくくくく
 かもよやうめくぬふをくくくくくく
 しらわくくくくくくくくくくくく
 ともみくくくくくくくくくくくく
 かぐ又くくくくくくくくくくく
 とよみくくくくくくくくくくく
 〇うらやま 山 卷うらやま と云事
 本く乃巻の百遠所と兼侍ふ介り書ふ

流しとあり守馬ぬこくに覺えく彼家此
きんもたり一ろ一そ織に又とこ
もくちりまひあふしはやり如面白
とろこふさぬうおあひこくまうす
むあーくまうおおひこくまうす
こいひよらまうとわひーめーてま
の才ゆきる才二三リりよんあゆ
乃もとにまー此別かーてやん殿上と
さき我家人にふーてまわみよるを

志強新乃心をまうくはかどく
リーくひひよらまうて山忍をたは
ひよてまあわを後伊よのすげぬあ
かハトて人もくかあるわわうの女人を
津世路ひて一車ふのーの
中一川ハわもたまふ皆人たたまき
スリりあるこおもひこれの原氏の車
うらまうてくれて人志流まわてり乃
少人まきる魚とて乃うまうまう

こゝろまゝにむすめ西に流るゝとすゝめと誓と
まらて居たり其種れゝゝ葉 ぐひまゝに
夕やこ 三つあまといふまゝに
宅り火 一率 女流 十廿 三十
四十 とうり 尋ねハ世帯の詞子付處
一西に流るゝとすゝめと誓と
きてまらてゝもろせに取らるゝる也
一志流るゝ種に思ひゆゝせたまふ
よ彼女ハとけてゆく種ハいとこゝと

少志りてすゝめと誓と
小祿するむすめと誓と
り一たまは種とあゝをきてかゝ
まぬせに乃もぬけ乃にゝゝと交りわ乃の
一とわ心をいふ女にわてゝとこかま
りかへけとあまゝとくひりゝとあゝも
是故よりしし中一人名やたまむねと
おぼしめかゝるゝをせりりたむとよわ
あゝと流るゝ一あゝと流るゝとあゝ

たまにそののら一敷にありけり
新嘉おまきと云脚一ありゆき事り
下まきこよこりり 福一この人を
心を業とも乃き業乃をまけ付つ
あゝぬるし一付ら同事也とて心
き一乃人おぬきをまけり一女成り
てふわゆるおこり 悪く人さ衣
人ふ志ひまき うみあゝと流るる
う流るるのまをふんでくわ来本よ

新入ううれなう一まうふ

さてうううけをこまぬつとれれれ
これ夏乃事也

入下いん 一敷の敷里 ひとつ引合付
ア

○タッハ 山を越ゆりわとまき一六条に
消息とやうし一いせんをうとく 喜宮
まきからまき一消息六条まきわ
ふいこやむ事なきており一

まをこゝ桐つちの四門の池邊いづみよており
まゝ一ま春宮はるみやよくまきき務つとむらゝい
とあへあくおりりしい非ひ君きみおたりま
をもうちた内子うちの子おししくむりりし
くかぶくふららさうへへ源氏げんじおむららく
糸いとだままああおおけけおおまま事ことと世よの人ひとも思おもふ
てててままももくくりりよよひひおお道みちおお條じょうおお前まへ
も夕ゆふわわかかままささりりくくりりささおお小こおお中ちゆうささ
女むすめおおままだだららわわああひひててすすままるるすすままりりけけ

りりええくくままるる是こゝここままてて小こおおおおれ
源げんわわああててここののひひめめ君きみのの母ははののかかくれ
ぬぬおおおおややももゆゆああくくににままいい乃の六む条じょう
わわららりりたたおおひひああわわまま小こ四し車くるまををささへへるる夕ゆふ
かか乃の花はな白しろききああととままままななままおおれ
花はなととおおききせせおおふふおおももららおお志しへへおおれ
彼か中ちゆうおおららおおおおひひてて是こゝおおわわててままいいをを
おおららももおおららおお折をりてて向むかききああままおおららいい
おおららあありりままななままるるををおおらら言ことばおお 白しろきき

あよま ぬえ、れ呵 たら目 ひつま
あわのげふの地 くらまきく 小歌
すまのげ 題ふたりわたり付へきを
源しのあー

おてこをうけりた思めあううきよ
おのくくゆの花にゆふりか

ぶふもたのわの人あへ日ゆくにき
さそよりたりの巻と云めをなゆめ
わわの上とらりていふはつは源せ

付てくくく ^{たふ} 葉内とせことあくくたは
しきうーぬこれや歌中ぬ乃わくわー
かーうの母もやとあやーい思ひあ
ううああわうひりふたまたふ福小歌
もも成ぬの月子ふ日あ、月あうー
の院へいさかひあふうわあのかの小家
ふとまりゆふいとありた家くま月あき
ーとやーうすわのううま物徳れと
はるまわと花詞 ぬりほく ううい

青^こいぶら^らいゆあ^りか乃小家小付さ^るを^らひ
つゝおもみ^さけ^さやうし^しに^ころ^と志^さ
ろんとお^りむ^をま^りを^さま^りひ^てち^やう
せい^んの^りひ^とい^い一^枝枝^をあ^へ
しち^あり^い引^いん^て之^れと^お世^には^り福^を
て^おみ^十六^億七^千万^さい^まま^さく^むか^り
くる^よや

うも^うを^らも^こふ^ゆを^と志^へを
こん^せも^ゆり^き驚^わた^しふ

と^まり^しひ^おと^らき^せひ^に
十^六日^に教^中り^死に^しゆ^う
に^あり^なり^して^も五^日の^あり^はま^小
一^車に^てな^り一^の院^へい^なは^せ
死^ふの^くめ^のの^りよ^なに^露乃^光や
ひ^ふと^乃終^へハ

夕^つゆ^にひ^もと^花ハ^たう^り
お^のり^もを^しれ^よう^あわ^け
光^あわ^とう^ゆあ^りか^たよ^つゆ^こ

だぢりし可乃ぢら免うりたり

な。ソひりりて十六日一日のぼふ

一。お院におきこらに不齊し。か

ひ。おとて。志おくり。きりり。露志

光。日。車。あまふ宿。ん。うりも

ゆ。池。ほ。うら。き。の。あ。ぬ。入。お

神。ハ。い。る。う。あ。海。氏。山。あ。り。ぬ。あ

て。持。お。ゆ。お。足。ま。い。ひ。し。く。電。た。わ

一。也。こ。ま。ら。も。あ。ら。流。え。て。付。さ。せ。お。り

へ。一。言。つ。て。ゆ。り。こ。き。ん。と。そ。こ。建。こ。は。お

り。客。さ。し。流。ぬ。う。こ。ま。こ。つ。り。お。人。あ。お

う。う。へ。お。あ。し。ま。う。う。ま。う。り。お。て。こ

む。し。ろ。お。と。し。け。て。お。せ。い。お。と

こ。お。れ。て。り。も。あ。お。ふ。り。け。車。に。被。は。り

り。お。お。右。近。こ。云。ぬ。お。お。う。い。て。お。り。心

お。目。お。し。ひ。や。る。も。お。し。き。神。い。流。ぬ。お

と。し。し。お。事。お。人。付。お。わ。せ。あ。う。り。あ。へ

う。し。さ。し。海。氏。お。へ。あ。く。あ。き。ま。し。く。お

かしてあれつとやうしくしを清めまを
たいてして舞うとよ清き人として思ふ
まきし里路ひ——らまらひ——し路ひ
ま——こわお——に我くらぬい乃清袖に
うれまききこわ——おもひけい——なん
せより思ふハ舞也まら——を路ひ
りへらせめて舞らぬやられいさまふも
お——さき世乃きまのふ——秋路守家
まうにおたわま——こも——わやのぶ

お遊をいこ遊るゆこ——り——よを
て清きふと——いと清ん此にりく
くまを路ひてけらるせ路ひおほくふ
まらろま女とよ是也り玉らる路ひ
まらとまら路ひおて六条院へわ——ま
お路ひては清きよまらひ——也清氏
もり——おほ——つうひし人也
三。わらひ——まら清きひらまきこ云事
まらま乃上乃わらひ——ま清路へ

身よつこく陰しりもくもくむくさまの
祿よ、よひもくみくは美善

こよこ孫しゆんや美むらさまはわりの
たむきぬまゆんしゆんはあつしゆんは
源しゆんはゆくりの藤つが乃宮をばり
くちわやうのげきしゆんはあつしゆんは
屋しゆんはまぐ人れおすを流流するも美
は心やあくさむとおもひしゆんはゆんかり
なひしゆんはあつぬ世帯もつら久しゆんはくお

加は小きしさまの上は教行ほくはゆめ
いよへおりしゆんはあつしゆんはあつしゆんは
おんわりのこゆわをいむらさま乃美れ
ゆりわねとつら事なるはよるんて
見終りしゆんはあつしゆんはあつしゆんは
更しゆんは面白くはく里わとつら
或部思をはひしゆんはあつしゆんはあつしゆんは
ひしゆんはあつしゆんはあつしゆんはあつしゆんは
なりませね友とかりけ人ゆへ雪から

なまひし事、源氏十七乃、亦とて、
やこそ志て、水山、り、
とて、め、し、
ま、ひ、の、
こ、
目、
ま、
れ、

ふか、と、
此、
か、
に、
り、
と、
た、
た、

花まじりさしりり さかす 松もれ袖 湯
乃馨 深山に花 じり糸 大つの
こゑ 谷のうこさく 藤様も付けか
かわりもとむる 山の鳥むらなく 糸お
ひらる 庭にあり 花らりき 是れおひ
山うへ乃事也 花むらさきれとハせん
てい乃内子ぬう 花むらさき内 ひとめ
しら壺の右にハ花ぬいなるわあめあめハ
むらさき乃上のうもむむすめありたさ

あやしくりあ母あさくしりりのうも君も
うらさくさきておしきみ也 ねこのひり君
のうらくしき侍くしらと雲かしてひら
しりり、こねさくらたさくさくして我内
まじりしりききさくくこれあさく
ちも入さくんとむらさきりりしては僧都
まじりさくさくさくさくさくさくさく
らわあさくさくさくさくさくさくさく
うも君もさくさくさくさくさくさくさく
にほ

一もぢりきしなごりならせ給ひて
二東院の西乃臺へわくたてまらひて
もてふしつかしつまな里たまふいり
も十乃年なかりだわらひやこし
ぬゆつたりきりこころに月夜にわ
うりさそよう京の花を敷きて山は橋
ちきしきうわとはひひき又きこひ
すぬと云事花はく家事あまのむら
さきの上のすくめ子流ひぬひしき

のぬまとりひしきうばゆり
しきむしき舞の上りて勝之候
しきひきいよもあまの人云たわ
しきへいひにかつさすめ子や
すなもやうりらんこむらさき
乃きうひしききりしき一季と云
又山養に菊おひしろやういむ井
云更そい僧おれ城へ海氏をよひ
善りむしろもこのさうりきり

か免と尸より被ふ家也いむ井と山精進
まづわ物乃事也三礼をすいひも井こい
しやう志ん乃る也又小山は物産とつあ
度あわと云ともあうりあへるは河内ら
乃備きりーに立かてふく西らむ
するに心を行り乃れは御ともれ
くくしーの山なうーにだけりまあり
ー乃物々たわを名示されり都たわ
そ可ありー乃上礼事をもやせりひ

ーさーみむさき青六正二条院八ひ
いふた目ー然如乃女と美路人の中
りあ事あり是ハ九月にうんをなくして
十月小徳氏とわあわびくハひまううを
君の物くの周知れハ越えありたうわ
日色の衣成まきとあるりせむわゆはふハ
秘史とソひくわわ、くてあう流さー
あゝぬわさあゝて源氏ふ十三むらさき
の上四十五よてかゝるき新小雲かくき新

ひも氏情^{あはれ}ありをもちりし世に道^{みち}世
乃^な變也^{なり}世^よの^の養^{やしな}えりし世

末^{すえ}にむし 山^{やま}浦^{うら}さ^さと^とま^まは^はし^しと^と云^い事^{こと}ひ^ひら
の^の文^{ぶん}・[・]尸^して^て古^こま^まに^にり^りき^きう^うと^とひ^ひて

御^ごあ^あと^とは^は珠^{たま}文^{ぶん}一^{いっ}人^{にん}あ^あり^りと^とま^まい^いと

あ^あひ^ひり^りま^まる^る法^ほ位^いの^のふ^ふて^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

あ^あひ^ひき^きん^んし^しき^きて^ては^はし^して^てあ^あり^りと^とま^ます^すく^くし

く乃親よ入て二東院来此臺よ此きよを
持ふと方しき源氏の所也

なつしきよせありに何よおは

来つて花を袖よぬききん

こよこ持ひし也あはれぬよす家信むとい

いよけ君さすう貴なりハ強しうほり

ありきら此を付するうりしししししし

よふきてしおしししししししししし

しる人是なるわしれと心ゆく思ひてあは

ひ乃上代ありし歌中お心へけて源氏
たりしまの成りありハきむとをあこふ
付てりしはめにこあしハしききき
源氏の袖成りし

もろたに大因山ハおししし

入かゝる人きんしきよひおは

二月十六日乃事也この女君まらんハ参成

ひきき終りし也

意しる宿のこし

春はいさよひし

ひと 大田山 野中ね かくし

あまこふ宿乃中ねへ付へー

中のおま乃賀 是春もみられおとりの事

きりばわ乃内門のそほ院に御うを

つらりたきふー此十月なまといおまを

もてかー内におわさそまみちのり

とらおまの下そまの志む殿上人宮

うらもま乃まわやうたふまひねり

源しれをいりのま舞ねよりまくと

あーらるーまるとんあやーくして

及の中お舞ねよは氏まげまき種て花の

あーらるー乃こ山本さうらーりこ

しのもこらいうく教へてわの小初ひ

家氏さうまけさ大將らて西あハ菊と

打てさーく人ねふゆあそん乃舞り

やまてろく路まきま禊の詞

さーらるーまきと あーあこ えへな

うか乃い初ひ 本ぬりまおま 樂い

せいかりのそり 五番にけんとあり
ハ五番に付てあれきよしりあそびも
なわとあくはれりやせつそりあそび
ふしうはねあそびのふへは氏我舞あそび
もは流しはれんとあそびて思ひて文
あり

物部ひに五まふつともあそびあそび
袖もらうりーこまらまや
ととあそびあそびあそび

うう人乃袖あそび事ー遠し字あそび

立井もはあそびありきとハとあ

とありーうりー人乃袖あそび事とハ番
屋うまひあそび志やうーいあまひとあ
へんあそびやあそびに孫侍あそび
あそびあそびあそびあそびあそび
にハしげあそびあそびあそびあそび
たろひあそびあそびあそびあそび
十一あそびあそびあそびあそび

八年也先を浄泉院とすあゆは言來
かへしに 疾けをまきり せう
むらさき 山世にくる くらくち
この巻にきくへちとておぼふなり
付つゝはありまふある事なるは
まらひ又らたさすの如く人かい
し乃介といひては比五十七人也
源氏ハ十九に成つまふ、此女房にたは
少しはせのこゝに 木やの親 雨は

名あり ひは乃毫 あまき あつは屋
うたう らんめいじん せい
夕立などふ付つてはゆあまて女
えきとあまらわふふふふふふ
まひあてん乃くはまきをん
すにあつは屋身并てしうあまら
このきんかいひあま上はそめい
あへて居たりふは立ちわらひて物
ひりりおとさうあまらるる

くしげつわなてくか境——くしげつわなてくか境——くしげつわなてくか境——
花よけ中のものもとに花あり——たふと花
とく中——将軍あひして源——花君をたふと花
とく——くしげつわなてくか境——くしげつわなてくか境——
たわ——也あつ海きよあき事——なれもみふ
乃おま付へ——くしげつわなてくか境——

○花の忠む 山花花能忠事と云事——彼
あま、あつきの通れ春大内には花見あわ
まんでんの様さくわら、花の本まへ

あまのひあわ多のと懸てくしげつわなてくか境——
殿上人花下よいさか海て詩まつくわ花
し也き後より乃もくらのり花舞と
花のや——出さる花はてそこ花とくく
くしげつわなてくか境——くしげつわなてくか境——
也らり——せり花くハ原——も立て舞花小
及中たたらて柳花えむをさい花の——也
面白くは花う、花を花よ是後代ハ
きいありぬく——くしげつわなてくか境——

後の世もたれ—おとくりよ事ある—
花ももまひいらり—うら—
おけり—ありぬるまひまもとやまの
藤つかわ—りをたくとあわま—
わ—ま—うき敷の三のくちり—
回らわ年まき女房乃あな—
ぬま—おわろ月夜に—
あり—ほとに源氏いと—
おほ—て—ひ—り—人—

ひまの目りまはう—は女房—
乃あな—あうき敷の—
君—春ま—
—の花乃あむ—
あ—ま—
—の言—三乃—
—
—

まはるるしりやそとらあんはなわ
照侍のりこおふまは橋北三へうき
まひりるるの月をぬらうし
かひて付つて五家三れと地ふとあ
しとてなまひまふまはよくく
花の忍ん乃さまふは乃扇は夏りい
をなるつし此ハ二月廿日きを思ひく
こあひなまひり夏方して御門り
きせびひて夏まはれたい小たわてま

母のあうき教のあーきまきふれまに
世残るわをあひてもとらわにくら
一夏あれを丸の庵まの源氏をひまへ
なるすそをくそ六条のまりよむけいに
あーとらういふれすあー乃、こそ

あーけ

○あつひの巻 あつひと云事一のふまに
源氏十二より元服乃その教よりなす
むこはありたりまーこあ方をたあふ

えげとありう種より後民のいふくこころ
う種くになわり種よ人も世をも
眼もてく種むあて君と伊勢おさいくう
に伊勢あわしお引つきて伊勢へ下りふ
伊せりえやすにともいへし
あううの浪車 種むこころのあめ
おとく云わうのこころをふりこころを
うひて付く一又の物のまらわたりこころ
まこと云事さこころのまらわたり目むくさ事

の上お一浪車にて伊勢一におおひ
浪車一おわうあうかうくおささ
おんいこころみおはうせ時とくさくむ
さき乃上の浪一くしうりせおさうも乃
まらわたりこころと云事おささ
へ一浪く一おさけつこころとゆ
いひおひく源一うこたき
うりわなこころちいろおおたき
老ゆす家ハお乃こころ見ん

いよこ孫ふむくききお上内一返事
子為ともゆくてきたあんなりあく

地とる塩はここけろぬー

とよこ孫ひーせらねろち四母の
まらりをとあませりあハーりやうに
あなとを引寄て言葉にうんで付へし
さる孫子彼あひひの上母目さありて
内さん地りくならん屋はとろろ
ふりき振てあれハおろりあらん屋内あ

やえ大ま事よてりまわれあまなまは
孫このお思ひ屋るへしそのおあひひ
上つろ名のおあーうわああひえ
上りあこにこまをさきくーとこよ物
をまはる清息玉乃御目ろりあてえ
みししろうおろろーわちれきそのく
しとあ君生れおふははらろ流流くーに
うろあまあくよろあ乃くまろ皆人も
よわ屋すすすー心りてあ君おあもて

とくのみてうぐく思はあらく
ひらきき乃上は十はく
うさそ娘のきまのちきふと
あけ眼もきんしおちるもの
かーうる事をいゆあくおほ
るはむとあはれむじくさまの
てつきを教源氏に流心まわ
るに乃きまふ事あふひはぬ
け也明日の東やうはとらり
く教く

にあつて志くくうてあせ
是いつ兼て福の子いづくは
け屋んかといひ三り
あつん、と乃きまの心は
ふと志をいふと心まき
ぬきおの心一ぬひとい
志すすけあつ流る新梅い
教乃乃日く三日は教は子
あつまわ大くおとめあひ
あつ

ありきとも月出たくもかりひけきそ後
は言葉 三、ひとつ 三日夜乃もあ井
おのこ 孫のこ 新梅 是亦ハ葵リ
免れここゆふ事よ付へしむくさき
上治年十六うろ十 月母氏の御
と年可二也

○さうの本 山巻さりきとらふ事ハ号子
祀りきえきる一乃すきものふき物
ゆりにまゐておまゐるさうまゐ

あつひ知心巻にやうはる六条の夜息たきこ
たむと免乃さいくういせハ下まま
清みやまのわしを野くまますまたきふふへ
きけりきききむくすままままままま
下まままふまかまうまわまくまおままままままま
七廿八日の夕月夜もあやまりま所まか
て美地みやあまれまくまおまりま立まてまあま一ま流
車ま一ま乃ま也まひま屋ま、まなまふまうまらま屋ま行ままま
さま備ましてま彼ま野まくまままへま海ま氏ま家ま孫ま氏まとまままハ

お中一めきこふ家業エセのきを大、きこひて
くらふ本乃香井りこさひてあさらり原し
くれく小吹フクをまこるカク物方り志
るそシ宝乃香にまうひいふ物物の福をえく
やぐ焼屋りりりかひらるるよんくのこせこ
うの香色もさすここの物おもりーま
人乃恒トコてさう思ひひのこひ事一あく松ひ
らんやううよて昔ひやりーうわも
ありまこまて山かとのとたえをヒあう

うらやーく松柳ーて山あおさうまを
松マツたうせ松ひてこあの日へさー入て
内物物なとー松折マツ折マツありーそ松
さう本とつあうたましく物物さわに
あり月らりく形りーうあまら
松マツそわとれ詞ウタ夕月東タツキ葉ハりま
と松本の松香マツノカ松マツしーあまらりり
阿アの月松マツ別ワケ秋の系アキノキさうくむしの
伊勢イセの松マツさうそやせのはいれり

乃くま伊勢なるとに付へ——いふもたい穢
うこれわうきありぬ別わかの心こころを伊勢お
きりりうう人て付へ——ききこのきき
内門を厚よからさきせぬふう此比りわ
源氏の事——うれて物うくおほ——て
内侍能りこれ事——もら能りまきり——あ
うれてすまへ——ついはなりのきけぬよ
夏山まきにあまのいへ伊せぬよ付へ
うう桐はかまぬ門を何れぬまき——わう

きりありな家屋い人のあひん——志
きりんハキ愛あまの書也

○花散里 けき花らるる里記りし事

さしんふ乃り我あうりしししし時を
うふらるる里とさうてうことよ
とりしあかりあうり源氏中川わたりへ
思ひてたり——ま——に——ち——う——
ううにいあわさるるううう山かと後入
まのり——也其詞 五月雨ううりり

うふあ 多ら花 宥乃、き好 是亦ハ
皆五月由のころ好事なり種ハかこ
起ハともふらつ花も付ハ

○と海 是ハきんし使由あま志由一やく
院山位位の町花おえんりあひるあし
おあろ月夜のかり一ぱり三お事也
山心さーもとあめりおあろ一お事
あまハきこしてうら使治りく大ささ
販立たさうひてとさハふり一お事よふた

てすまるとハりしお形り比ハ三月廿二日
也う乃詞 ころこの鏡 此も屋せくる
さうぬうろこ 極おろ種志画け
月出るあ流これくハすまへおもあらせ
たきふおわむくきあは上にも好をわ
之條ハ一折れ言葉也まこころ一この
名うわさこころおり一けめおをふくらわ
おこり一ころくらくまくにありてもて
あーれこころお中おふささ一なまらよ

あゝおほーてちりひ比^ひわうめの衣
つぎあもあうりし小何れ月日とらま
海へ舞^まの舞^まあうひいせんころ形
おれ一志流と様より一何ま屋うたい小
うわ給ひておんりき様ふとくい比思ひ
おれもやせおんハもれあう^ま斜^またをひ
らうくくおれ一してらおけけお様
やせえゆるやうく海はよみおれ
方を控^すてさしうひぬとも君りあうり

さうぬうハ乃影ハハふおま

とらおの影ハハふおま

別^わててもけいあふとまるおあうハ
鏡^かをえくもあうこめてま

とら 給ひ一詞ありここにけりここ
すま乃別一付きせだまふハハひま
さきふはりまのあとりあまなるま
さうせおふ何^い暇^まこひにお院^{いん}の由^ゆちる水^{みづ}山^{やま}
まおふハ氣^きりおれまうすまうりは海^{うみ}ひ

て都よりひまかへぬるな海内一任ぬ
きりつ家へ一ふり平に中絶言
いづらにありきれてりかた建はくこ
ふらう人ふをきわぬあれは波爰しくに
立ちるさちとせんころあくありきせ
心遣せち終ひてしわえぬの家ぬな建は
あつりわたりとくろけくろひ松の柱竹
乃りきりりのばりなとやうりわす
ふりくたけりろし 塙に茶材たて石

橋をくく入て町の社見にあわてしをか
させたまふそ社神祠 茂木れきく
庭に葉 ぬれやりぬ 松のそり
名のり 竹のき ぬれくはひま
家井の志きありぬあまう葉と云度ハ
たりにますはぬ山りころけふと我
かにういぬのけし葉こりし物をおりく
あふりあせせ四境くたを種ひ免はく
ふりあて

小歌ふくはくく柳一海一そくそく祭
友を尋 糸をめの床 四方乃あ〜
う〜浪 なが〜こまうく梅 五くか波
月形りか 是亦ち時と海乃音まひまひ
乃志ま也いふむひま虫教をうまのうまひ
うき名互ー一なとらふ事を付〜一さ〜も
さ〜木の葉よ伊勢へ下たまひ〜一内息不
ふわあま〜一源氏〜く〜柳〜まひ内
と〜〜ひ〜内海〜ひあわさう伊勢うわ

と海のつみとそすまふあへて人れり
事一也了れ〜は まま重ひ〜か文
伊勢志海 志かひ志〜 云〜ひ形ま
我力 思念思 うちきりうか 伊勢をの
あま 三れ〜の内息ふの又あり〜調あり
う〜てうお年も夜目ぬ次〜の〜れ春
乃比あ〜種形ひ〜一あ〜ひお上〜あま
源氏ひま〜う〜たき神形〜一よ望〜ゆあ
恋、形〜一〜て〜か海世の〜里をま

○ 明石 是も川巻に原氏はまらわあし
乃うへへはさひおんハ阿ーハお美い云
彼十三日のあ、ほきおきものこも後さ
や〜四つ〜屋甲されハらいさきさ〜
のわてりりまのさきまうくし志んから
是をあかー乃ハな〜ツサヤ故人おし
よ皇業心下てきん〜をさひまを御
ひしひふまきつは君ハはくとおれや
今さてあうや〜い〜へうら海ひおし

入を娘びーあま里つきりな〜思は
もさそ詞 むおんのあ えひ〜
あか〜をん風 海は〜 海らわむら
これ〜ハ明石へま〜わたさ〜
〜千部乃内一恒春ふもやう〜
海さりて〜り〜やく程也 親あ 五石
目もた〜ろ〜り也 古里ハ池あり
〜げ見ゆ〜れ〜り〜言察もあわ〜い
よわて付〜は〜是ぶち三月也わ〜あ〜

四月廿六日 夢を寝て人の市街東の地やう
のわさびのうへー 流すてあゝたう
海へゆき程までとくあーカ 流すた
い入たのうー 色ー けくむとあ一人
持ころこ運えむくさき乃まきふわ
屋とのわわ山山くく人くくわおー
ひとめありつひりおもひ子ひとわ子
あー付ハけ事ーやあーたあー
流すふめてあらんむこまとー 思ふ

よ光る人ーすま乃ううー志流えあ
まやうてうあーてう愛しにうけし
あわてむあにー里あんと思ふあ
成や吾後の神のありまこと思ひん年
月日みよー 流わわきひるま
流氏乃の流んー老人あか同様に
入るも夢と見てとらあ人の物ーあ
よまらわき種せいふーソみあす
あまけんであまらなあよとるあ

四らそ一あゆ敷海氏教（意）の事一ニ条院
むらさき上よりり数くおほ
あて地ありれたわふま神（い）こよみ引取
入れたんり縁えうつらちやうおこを
もらへ集すく免まみ（い）ひきききき
て是（い）に女のひきするまよう似ほりり
しなまのこ乃たきひ（い）一ま言はれたらわふ
一してんひよりまだこへいひみむまめ（い）選（い）色
志やうことあまそくひめく引け（い）たけ

ひにこととぞとあふる屋こPも一とわ
一しあわ海氏もゆ一くむりり一と
つゆのよなまらうの詞　らふこ色
こすことすこと　あひり一屋と
たりの霜なとひの事も付へ一山
おへえ霜ハ入る母ひませし（い）形り
親乃しとらわひまへたてとまきとりお
このくひひよわてふおしかりをひ
あお形（い）一し乞おほ一と

秋乃夜月け能くまらぬふふ
やがをうけむ可おも見ん

とくくまらぬふふ也まてふそ母けの弱こ
りふ事一も明石小付ふあり一車一と
云事一のなるあまて入る奉をけらわて
持ふ家とありいぬお月けあ路うわこ
おろともありうわ一茂更次一五てい月
にえ古へ召りへま道はまは満文三 月
うわけきのこ一れは月まており一海馬

ひま明石大二海三とせ也三年の別
と云事一是也三年に旅はれ一海一
さへかへり上りふお教の別ふもいそく
おとくしひ思ひて

教者一春乃足勢ふおころうや
年一少海星を別とぬるあま

おろみなきうひておくくみやこへは
だまふよはぬ乃心の中おしひるるへ
入たもぬらわと一おろくもはひるるへ

ひまそいおらわにまらち原氏もあは
くありまじりしすくくこやと別
ももまこくゆかや心く物思ひ流ん
か成うりりくおぼくわさて何
の上代御もくに非君おまはして松風
の巻に三よへ京へむ。へよせまのせ
てむくまおまは御子中てまま
女あしあの子あーの中宮ふ山
事也又ありにやんじりるり云

事そハあー路上とうまふひれ位
にもら終るるまらふまおーおもす
りやうねいんおぼく人のお口わ
ままあままおらりやてむくま
乃うんまあもくおひまらぬあを
又てはれうらまきとすくわ
まがくくま流ゆわらめ
らるあハ備乃あまきまま
三れまといまらり山あな

こりよせて付き給ひ子ハ

○方不待くし 此春ニかほり〜と云度

数なりして何ハ能事もろいぬ身ハ

何方をつくし〜思ひたれん

山舟心よりわ〜かほり〜云都ハ

りへ〜進てわ〜な〜と乃〜と

あ〜たひら〜ひらわわりの天酒をみり

因大にけけ給ひ〜くさ〜へ給ひ

ふりま〜り〜けり〜ゆり

ま〜もあま〜く〜位吾の祓川ちり

〜おぼ〜や〜て秋の〜り位吾へま〜り

り乃あ〜の山わ〜と春遊〜と小お

わ〜た〜て〜ま〜り〜り〜わ〜り

おあま〜ひ〜き〜ん〜し〜美の給ひ

〜て明石よりま〜り松原〜車立

は〜けてい〜ん〜貴〜ま〜な〜わ〜り

給ひ〜り〜か〜と〜す〜く〜ひ〜な〜ま〜い

き〜とめ〜え〜と〜り〜を〜あ〜ま〜た〜ら〜れ

付たきふへーきてけ巻り明石の上れ
眼君うきを里路人の来りり浦一めのこ
や、くもさるうお詞 問うとも おま
りけ いえ乃おひさきこつ積りいはいめ
君れまもつー時お志変也心け積ふつし
きま屋 いまきせま屋とらふ事ーらんし
名山へまのりおぬまむーうつをんと
おーし人徳おとこ体とおすけいぬ抱お
洞司ーありてわわーくくりりては

東へよる小きま山よんくーあひ積ん
りハ又志きひしーれ事なお積り
おて暗のいあつ流ちりの小君をり
へお又あわを詞 せま屋流あゆきあま
みち 志ほあーぬうこ せまと絶あ
貴儀 了れ又の言祭なわ是おまをゆ
念を 名山 せま山おと小付
はくくいよりおをたのいーむ
おうひあーやま なぬうえ

ひらく心せきこりしきき海を也

こしぬ清あこ人のるる海ん

源氏集り形ふうりせ人形へ入るゆくに

らるるの心たわもろろいとたまるくこれ

心やお坂山おと小付し

○らも清あ け巻イロハもきぬとゆふ事一冬

あむらさき乃あひらひ清はひえお乃

まきこりみしあめ日ぬくはおあか奇

あ層乃だりかろわひた地乃宮イロハ乃

内むとりろろ源氏あれみて志づく

立よろせ形ひりともすま結ゆこひ

め形とふびりあもかきせたまこひ

き積ととらこやまあおとまきこえて

し一電流あ流をこくこりかきわぬく

あひり形の中位居あすなまひり一旅

ひまよる色こあろ形ひてり花ちる黒れり

こくハお月りりりきこあまこわ形ふお

お月雨れは遊あろく志もまきむろろ志け

きしうき家あわら終なるひらち乃みや
とてあの人かまよわかきしうわを
入るよきまわに流志きげまは内、内
きしうきし信お人か馬のひちしきし
ひてしうせおえう秋よわあし進ん終ひて
趣のまよもひき乃きしうらしくはくろ
えせあましう二らあわて二お院の
来志臺たがひよはあてあらししなわ
すくし流心くくたなよしし出きえう

腹はらきまよわらわら人なるそのむら
うしうし

うしうし我よりとり免道みちもみく
あまきしうま、もみあく流を
あまきしうま、むらむらあ
あまきしう宿やど瓶びんのひしあこたきもす
あまきしうしうしあまきしうしうし
あまきしうしうしあまきしうしうし
あまきしうしうしあまきしうしうし
あまきしうしうしあまきしうしうし

まきわて海氏流支那との内政事をも
—と人きききりきり子以徳らむ能
志—りり—人ほろ—お女二—うり
てり—おひひだをまわて下侍流
もだる—おきいあわあきあはれ
うああ—はとおもひ—ほとにひめ
思をはうらすそまわて—うるに
我—れをら—と—あ
物—り—くぬ尺—わ成る

を飛越え思—く—小内侍に—也
○ 志ありき—らけ巻と念合を—事—
乃由—のきん—け敷壺—
思—て—お—宮—
乃—は—ま—の—人—
—は—ま—つ—乃—み—
み—や—
—お—
志—ぬ—

まゝの喜まゝにわきまを打きぬくべし
—— 此川方元田代 源氏よ路つ成
りしはもわが子す—— 入あひの上
乃又去后とのせらまやうさせ給ふ何事
も清心さまもくもく—— 清心あれ
ひめ君とうまさんかきかきいさまよみ
源氏よりうひ—— 伊勢若狭みやひの母
のさしんとうにいら給ひまわさせ給
てせん—— ありまふと海子よまこくまわ

てららハまのせ給ふこわしくまの
まへ、梅つかもり—— くらにを名たまたら
たまよ法門万が事—— よわも忍成この
せ給ふあはくよわあつう—— まのわ給ふ
比ハ三月十日くらあまのこのうも
なり、清心はなわこくまさん電梅は清
たまよまきて給ありまわこ、法門の境
ありせのまやう殿のひろひき—— 清心
乃、うひて因があはくもくせ給ふ如

内多ら此内代官女房此三人はくも
きつたわら終ふらわて心くもあうう
きそさううハくく兵部々々さ此海子
リンしし終ふくちくいんみきくにた
稱つわあきえ海氏志四方わ可きあ
志乃二此急成くわゆさ終たわ是り
うわてな勝終ふさく志あえせふみす
まありりの二系之ハすまよおりき
くありたるとんねき終終く終あまわよ

是く乃くはにうく此書一此山のたぐりま
居心乃まうりくあはき一終くさう終
我あわさまのよ書白たう人はゆりておろ
りきんだとらんくあ一是ま心りて
清けアしし志は我も乃なうあまわ
にひておへ持て乃わくせ終くもむく
さき志の上にうたえんをたなはは三終
うきとくりよ一にけ志終事入あわ

○松風 け巻まらうせとく事海氏あり

乃修のそしに源氏をわらふに皆りけり
まをむね心けたわ能く心け分て行けへ
し母に二と名替なるといふぬ、けりか
小付つしひり思ふとくしと務くいひるあ
めい〜 海北名所とふとち松風大
井も付〜 又い言きりこたけりわ
つふ〜 一まゆわもいこまおこまの
て〜 あらひひりふこた〜 一て小名が
おきの枝まけけぬとさあ流るるハ志ま

おきと心け〜 一〜 一〜 一〜 一〜
と心けへ〜 一〜 一〜 一〜 一〜

○うひや け巻うす雲とゆ〜 一〜 一〜 一〜
乃女院からさきき勢給ひて及源氏後孫ふ
入日さしこも小たふ引〜 一〜 一〜 一〜
物思ふぞや〜 一〜 一〜 一〜 一〜

け〜 一〜 一〜 一〜 一〜
藤つ初のまうの比の志ゆ志やうハ
源〜 思ひて山内〜 一〜 一〜 一〜 一〜

あまの宮乃後乃後小もさしおのり
市でく行いこまへ徳通十一
く乃乃考も所位に侍りせおのり
やく廿乃文とも中宮うの女院
一りうあうせ終ひて月本
廿七もくく進さるおのり
天下里やうあ人も門えし
の道くわ分きんし乃郷心
やう一大方お世思ん
心あうくおけりせだき
一今ハ浮世お名うわ
人めよハ大かこお事
さひやるし野海お様
いしあうめおゆあ
あくゆあ行を日
乃雪バうもく
まうひけり

あまの宮乃後乃後小もさしおのり
市でく行いこまへ徳通十一
く乃乃考も所位に侍りせおのり
やく廿乃文とも中宮うの女院
一りうあうせ終ひて月本
廿七もくく進さるおのり
天下里やうあ人も門えし
の道くわ分きんし乃郷心
やう一大方お世思ん
心あうくおけりせだき
一今ハ浮世お名うわ
人めよハ大かこお事
さひやるし野海お様
いしあうめおゆあ
あくゆあ行を日
乃雪バうもく
まうひけり

まきとらふらひを乃女院とすつて
すれいふは雲とありい 夕夜月袖に
色づく昼く日くわ しくしくおと付へ
し又山巻よらんりにさく志んく月ぬ
志んく雲影多く位ぬまそふ思義なわ
し夏やうしにむらむげさおぼし
おけりせ給ひて海なるしよ女院志
内おちよておりし志く僧初大屋の
お持僧よまの給しり人お少ぬまよ

彼源氏の君お山よふしおりし
一さいの事し親お思ようわおこる事あま
おやと志路し免きそお海んしくたを
その内へりやうに天下おたやのあひこ
りきうせをりあるに山門大よおるま
おりめしてそよ源氏のおちきつて
ふくくぬよほき給くとおれせられし
りせつくるる夏はるへあつてたうい
り心乃もらハ心け給ひ及う世も志つ

まじふ家そ御心おとわわふそ叶四代
子傳氏廿凡の流本藤お言くそ思ふまじふ
院、うつくぬらせ給ひて六条院とてそ
いりりし事神

○あさひか け巻あさひかより事きんし
の流うしり

乃一打の流新らまぬあさひ、ほひ

花乃さしりわいすまやーぬ流ん

電ふへまー一前あさひわか給備まこ云

かやいさひぬんお茂のいほきまーし
たりまーく神乃ゆきまの因まも
何のあまこしゆりきおひせほおに
内心つとくそやみ給よむりぬふあり
てハ山たは乃りせのくそやま一紙に
す給一給り三紙は あまかか
あまの なまらま事ま付し
あまあやまゆもやんーいあかり
おうらそおひーくともあまらほ

てはよきつ井子傳々〜不流〜孫よ心づ
らくや〜ま〜あ〜を付〜

○し女 山峯にこり〜と〜事〜あものりん
〜乃まつりとり〜事〜内裏〜は〜
りさ〜せけあ〜比十一月也二十より内
乃女とよめ人〜天人れい〜い〜
〜〜〜舞い〜え〜〜舞〜入〜〜下〜一人
な〜と〜お〜〜〜わ〜ま〜〜〜さ〜〜家源氏つと
め乃と〜〜内りお〜とあれ〜終みけ〜

女とあ〜五〜ま〜〜せ〜〜に志あひて
乃らき山流〜〜せ〜〜 源氏乃目り〜
にり〜ま〜〜むらま〜わ〜〜た〜めよ志
乃ひ〜むら〜〜〜い〜む〜わす神〜
むら〜〜め〜人〜さ〜う〜け〜おほ〜〜い〜〜
も〜〜少のぬ〜ん我と少りぬと思食て
お〜めあおあ〜と〜ひぬんあま〜の袖
少のぬ〜の〜も〜よ〜ひ〜へぬ〜は
とよみ終り〜ゆ〜んじぬ〜り〜も〜也ぬ〜此

みらり女いそまゝ内裏よりけりーの
すけえきあゝいせゝてそりんー
の子あゝひみうんおのりーおぬ君乃ら
ーハタきり乃天ぬをまゝー、けぬ紀
うわとまゝくえぬおあまゝお子とも
うゝまゝし人なわけいゝにハハお免
神乃ろろおまゝおゆりにもお人きを
らまゝし又け巻ふゆあきりお天ぬ十二
ゝえきんあゝおぬら回たにえ佛女十

四ゝろわようらぬのーまゝはけ大立
乃もともうゝおぬまおまゝおぬに
あゝゝぬのけていひまゝひぬおぬ
もまゝいぬまゝいひゝらぬらゝまゝ
つげゝらやぬひまゝのけていひまゝ
け我ぬもゝんいひゝらぬらゝぬいぬ
君いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝ井乃ゝゝゝゝも我ゝゝゝゝゝゝゝ
我は夕きり立立てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

— ならわしめにならまう〜 衆がまゝの
大匠あくろゆきて聲こゑ〜 ありあて〜
うわさうおのの言葉

雪う井乃あわ 福さめもろうひ おわさ
るまほくと志心ほく〜 あたわ電云
事は何〜 又人〜 此事〜 六位すくせ
記〜 せりれはわあの人を対ううな家際いざい
にり一画もく物産志 様子なくもあえり
ひまゆれとす〜 六位と〜 おり〜 ける程に

真宮へまゝわ給んと〜 信守新の事
なまはかろうやき〜 さまの六位くき
とま〜 ちら〜 あり見の事〜 ようわ
ほけつ〜 夕きりの大おれ水あをた雪井
のかりこぶら〜 夕まりに雪井の
うわほけつはりんするに〜 くにほり〜
くそ比較形り又い海まよ海長乃大匠
六條わ〜 四町とまめて殿様わ〜
う〜 女〜 ちわ〜 女〜 様子心〜

松を言ひて可一だのまゝいよすもこれ七
あきぬく一にすくたり一乃志
あやうの事一をさるくともありきつつけ
さきの子つ一ち極つ一く敷行く
里めく一く一秋一のむせ海入海方ま
比折にあひ一き一いふな一海きり
かの曲海に海方よわお葉と葉えあに
入一上も一ひれい一りてけくてまあり
あこよ海一えむ一た乃上れ海方入

あはれく春まのつる花ハ我宿志

お葉我此花はくもそも思

空乃くまうひをくもさ乃わ風花つらわ志
のみらあんとし書一もあるへ一その次
乃ま多又むくま乃上る海くさうわ女
由花のくへうおお葉の四葉書一にそ
えの花と心ももえ松もいふさわく
てくそ乃くもくもくは一く山はひ也
花のくあてよとさくヤ下葉子

いふふにゆあがの上よさかあくさく
まはらばーまはらばーいぬまらとらまらまら
りいあまきくけ人とえはらばーもあ
あくさえさーつゆのよはらばー
くまはらばにばらばら右をはらばら
くーしくあまらくさーいりりーさ
は物あまきくけらららららららららら
ーあらばらばらばらばらばらばらばら
四年一回ふらばらららららららららら

へわわらばらばららららららららららら
げあまららららららららららららららら
あららららららららららららららららら
ぬららららららららららららららららら
くさらららららららららららららららら
よららららららららららららららららら
きんさららららららららららららららら
ほららららららららららららららららら

へて来へ乃知りある御一年廿二
つ夕一上りつ彼天ま志を
を以て舟を也たまんしん
え舟もや乃舟をなり一也
一上乃えや舟をなり一也
い舟もゆ 行くし乃知り
へし一して一は舟をなり
小舟もやなり一は舟を
将志小舟もやなり一は舟

路へハ玉、行く乃知り
とわし舟もやなり一は舟
へし一して一は舟をなり
き舟もやなり一は舟を
くし舟もやなり一は舟を
小舟もやなり一は舟を
舟の右をとも舟もやなり
ハ行く一乃知り一は舟を
一舟もやなり一は舟を

きかぬハ海軍と云又猶くりわらふ事
ハたまりけし乃巻の末にあわ志リて
は徳子源氏の由ちふわあつしくの正母
此内装束をりし若狭子まけむくさまは
上へあゝ色川女のひりきみ乃わあつハ
お梅だまりけしお梅へくきお井
ありしお方白青花地へ差へそなだ
す家つひへ柳うつせに乃あまの志
くち子しきこきよきぬくりりや
り

山巻よあねのこしけしこしや船ちりせ
なるとまけ付まきぬバこりんこハ
玉りりおとあつこなもろもあつこ
うりてけきつ又あつまあつこ
のひろよかろわゆるこしきやうあつ
あつ事くくぬりこり
うたわねろりこりみけこりす
ありちやう乃めかあつこり
とやうろりこりお梅をきりこり

—のいろとま々おひりぬお祈り度
からまき—とま—ひてな残—をわ
ゆ——心取—の祈り—とま—れお祈
らわ—を—の—を—の—と—り又
に—わ—の—の—の—の—
と—の—の—の—の—の—

○初祿 山崎ま—の—の—の—の—
の—の—の—の—の—の—
内子—の—の—の—の—の—

七—の—の—の—の—の—
お祈り—の—の—の—の—の—

年月—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—

—の—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—
—の—の—の—の—の—

薄くわりのとけぬる池にわくみに
世にくもわぬまのきせめつる

とまをたつりけいふととぬありきて初
まはらうひまはれいけさうをたつら
うてふ ぬまこてめこりふ事すい首
えぬんり一れ右れとも志奇い雨ら
きせうゆきしゆりりまわうえあり
仁五きやう大りんやたごわ舞うのむ
中へ六束院いをいながらせらふら

清ゆきふむらまはれ上体に花たをまらわ
ゆきゆきしゆりてよにまらふい
ゆきをてしゆき、ゆきまあまきとて
てあふせゆきあてふ花そのへ入こ
ゆきゆきまはれゆきゆきのゆき事つ花
ゆきゆきこてゆきゆきゆきゆき
もけ巻ふとハあてふゆきゆき
舟あうひやう乃ゆきゆき浮てゆきあわ
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

もげあふく

○ 巻の縁としきりへう

あはれきくかたなりとらふかかふまじり
しよあたまなるがひのけりれ
心ひあふくはきとあふくわわわ
しよあたまなるがひのけりれ
いひかたりし中にも源氏の山登り
兵部乃宮御わかめくかひりきひる
廿日えね志のひらたりしきりたふり

源氏すましくいふか乃女忘れく
のすくれおつしきりまらやみで
まわりていふく清心をけくまきんと
そのあつしよわあま多くとらあつし
まらあつしよわあま多くとらあつし
いあつしよわあま多くとらあつし
いあつしよわあま多くとらあつし
まらあつしよわあま多くとらあつし
いあつしよわあま多くとらあつし
いあつしよわあま多くとらあつし

おけり乃志人五七女一人を世心と天
わうの弟五乃山子琵琶乃上をうり一是
あきわはか乃亦つよハ女と九事あり
琵琶のきとあわぢり流りて終またま
あやうおとまのきえはたるあやう
はくわたるけそあめふんて一おと
り事な付つ一月廿日此事なわ
○常夏 山海まことなるつこと事一玉り
くはるすま。せはつ山女ななり一かん
壺

とさわあめ山女一乃りく山也那
て一こもとる人あきれたわ彼
面女物種よらく大は山いめ君をなく
一こもわつて一ゆんやと面
向志まきこくしてえな一山にりあ志
源氏ま大はま一めあわてわき君をら
山志方一けくそあ心一り
河よりわありそあまふて一り
まのわあよけ心一を ちりま川一

川形と云事とあるは—き夏の夏あり
うふ七涼—蛇雨とほき—うおゆふ
———りなむ

○うわ火 此巻うわ火と云事ハきん
——まろ—と云子に——まあ—
子也いん—もま—乃云子あ—孫ハ
湯あ—乃云—ち—の四—こえに
もえたる—や—わ—り—あ—
てふ—の敷ハ月あ—くある、此法あに

あ—わ火と—て云子也と—さ—
終ひけつ時乃云—り

あ—る火—立—あ—ひ乃—あ—
あ—うわあ—、わ—る—あ—ひ—あ—わ—
定よみ孫の—敵—乃—の—法—と—を—極—よ—
りあ—とも—ふ—う—ひ—あ——え—う—み—孫—の—あ—り
け—と—あ—あ—く—ひ—ひ—こ—と—あ—く—ゆ—あ
あ—と—あ—ひ—乃—あ—あ—日—終—乃—り—つ—、—で
思—ひ—つ—る—ま—ま—ろ—と—云—度—あ—は—

○野分 叶卷野分也 以んる事 比以月小
大風 吹きてきふくく くらう流く あり
— なるうう— 秋ハ風 吹くもの也
とまんと— なるも 大秋は 大しや 吹きて
吹と乃 ちきせり 海は 能く 子夕 吹きて
大おれ 吹く 中ね なる— 吹く— 比
かき 吹く 吹く 吹く 吹く 吹く— 吹く
— 吹く 吹く 吹く 吹く 吹く 吹く
まき 吹く 吹く 吹く 吹く 吹く 吹く

のひの君に吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
紙吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く
吹く— 吹く 吹く 吹く— 吹く

さくらの道奇跡ありてとてあつくへ、せは
とくひのひにまよてさるをたのみ、たわ
中へも石をたぬるへたりにきして
大いこの風れとさくひをうわふはは
なくかたわねとて清浄ん、さくひ
さくひくくわが、てとて我がのうに、
な、さくひあり、乃、た、た、た、
大方よおき、ハ、ある、さくひ、
我がは、さくひ、さくひ、

さくひ、さくひ、さくひ、
分の、さくひ、さくひ、
林、さくひ、さくひ、
く、さくひ、さくひ、

○ 内、さくひ、さくひ、
ハ、さくひ、さくひ、
さくひ、さくひ、
子、さくひ、さくひ、

三月卯の初旬のころに
たつしつと決つた
ふし 海山 新雪
あふあふとふし
ふしあふし

孝長十五歳十一月廿一日書之

